

れば前の *k(ä)ntir* は乾闥婆にあらずして、緊那羅 (kinnara) を寫したるものかとも思はるれど *Uiguruca*, II. 20 にも *kntr* を以て乾闥婆を寫せる例あれば、恐らく譯者偶然の誤譯か筆者の誤りに外ならざるべし。

(6) *yini* は漢文と照せば「體」の意なるが如し、ラドロフ氏の方言集に *Aderbed-schan* 語に *äin* を「體・自身」(der Körper, Selbstheit) といふは、思ふに此の語と同一なるべし。

補 註

(1) 経名中の *yükmäk* は本書第六十七頁に於て *yuqmak* と読み“感”の義ならんと説けり、されど第三百十九行に於て此の語が *xuvray* 卽ち“群”なる語と相對して、同義に用ひられたるに心付けり、これに因りて考ふれば此の語は、*yükmäk* と讀むべく、本書第六十七頁に記したるが如く“積む”“集むる”の意に外ならず、されば *säkiz yükmäk yarur* は“八ツの集まれる陽明”、“八種一團の陽明”の義と解すべきなり。

(2) 第二十五行の *qod-* には(一)、「下に置く」「据える」、(二)、「除く」「捨てる」等の義あり、而して(二)の意よりして「死ぬる」の意にも用ひたるが如く、第二十七行、第九十六行、第二百七十二行等に於ては明らかに此の意に用ひたり。

(3) 第八十二行の *bäg yutuz* は第二百五十三行にも見ゆる語なり、*bäg* は「夫」の意なるべく、今 Kirghiz 語にて「夫」を *baj* といふと同語なり。*yutuz* はミューラー氏之を *Hausgesinde* と譯せり (*Uigurica*, II, 76⁵)、今此の語の根本義を知られど果して *Hausgesinde* の意なりとすれば、此處にては「夫」に對して家内の役に任ずる「妻」の意に用ひたるものなるべく、かの *ävči* と同意義なるべきか、とにかく漢文の「夫妻」の語に對せしめたるものなること疑なし。

(4) 第百八行の *aq-* なる語はラドロフ氏の方言集によれば「流出する」(*fliessen, strömen*) の意なれば、*aqmaz* 卽ち「流出する無き」は漢文の「無漏」に對せしめたるものに外ならず。

(5) 第百八行の *tüz kärinčsiz* なる語は(第九十一行にも見ゆ)、ラドロフ氏によれば、*tüz* は「同じ」(eben, gleicemässig), *kärinč* は「擴ぐる」(sich recken, dehnen, sich ausstrecken), *kärinčsiz* は「擴ぐる無し」(ohne sich zu erweitern) の意にして、兩語を合せて *mit nichts vergleichbar* と譯せり (*Kuan-ši-im Pusar*, S. 67)、今之に從がふ。

(6) 第百六十三行の *bosyrurur ulayur* は字義通りに譯したれど、其の意義を了る能はず。

(7) 第百八十四行の *kärgäksiz* はラドロフ氏に從がへば「限りなき」の意なり (*Nachträge zum Chuastuanift*, S. 884.)、されど此處にては此の解釋にては文意不明